

「享保郡邑記」には、「. . . 駅場、虻川2里1丁46間、鹿渡2里25丁55間」とあるように宿駅がありました。「秋田風土記」には、「街道駅也。大川と十五日代」とあります。

享和2年（1802）の「測量日記」にも、「一日市村、駅次大川村と十五日代り、下り月十五日」と見えるから、馬・人夫の継立ては、大川村と月十五日交代であったことがわかります。

「八郎瀧町史」によりますと、寛文2年（1662）に羽州街道の宿駅に指定され、その条件として、蒲沼村21戸・押切村19戸・一日市村13戸を合併して宿場集落とし、宿駅支配には檜山所領の多賀谷氏があたったといえます。

一日市村は、天正19年（1591）「出羽国秋田郡知行目録写」に、大川村と合わせ、「311石4斗1升8合」と見える中世以来の村で、「か満のま村（蒲沼村）」・「おしきり村」と接していました。

正保4年（1647）「出羽一国絵図」に一日市村129石、蒲沼村380石とあります。中世末期から近世初頭にかけては、この三村のうち蒲沼村が最も大きく、一日市村と押切村は同じくらいでした。押切村は一日市村の西部を占めており、現在押切城跡がかすかに残っています。

一日市村は、水陸交通の便から三斎市の開かれたところから地名が生じ、それが村名となりました。宝暦元年（1751）に郡方役所がおかれ、十カ村を寄郷とする親郷を勤めるまでに成長していきました。

大川村

大川村（現五城目町大川）は、西流する馬場目川に地名の起源をもっています。川が羽州街道と交差する左岸にあって一日市村と対称の位置にあるので水陸交通の要衝となっていました。

文治6年（1190）源頼朝に抵抗した大河兼任はこの地方を本拠としていた可能性が高いと思われています。したがって開村は古く近辺に中世の城跡や遺跡が多くでています。

宿駅が設置されていました。宿駅の負担は当村と一日市村で、周辺村々へ助郷を要請し、また藩主の巡遊や津軽藩主の通過のときは、舟・伝馬・人

夫・米・大豆などを課していました。

[参考資料：歴史の道調査報告VI「北部羽州街道」
秋田県教育委員会]

“菅江真澄も歩いた歴史の道「羽州街道」”から

NTT東日本秋田支社

13. ひといちぼんおどり

一日市盆踊り（踊りつがれて四百有余年）

手振り足さばき多彩にきわめてキタサカ・三勝・でんでんづく踊りさす手ひく手も鮮やかに夜空に浮かぶ絵灯籠のもと一千人の踊りの輪が揺れる短い夏を惜しむように三日三晩 太鼓と笛の音と歌声が夜空に美しく響き渡る

由来

起源はあきらかでないが盆踊りの歌詞に次のようなものがあります。

「浦の館から出てきたメラシ（女の子）年は十七、名は虎子」夕空に星がまたたく頃、湖面にひびきわたる太鼓の音に誘われて、どこからともなく一人の娘があらわれては踊りの輪に入る。あでやかに袖を振り、舞い踊って、夜が更けるとどこへもなく消えて行く。 . . .

これは、浦城に住む古狐が人里の踊り見たさに出てきたものだという村人の伝説ですが、浦城があったのは1430年～1570年頃と伝えられていますので一日市の盆踊りは四百年前からすでに踊り続けられてきたと考えられます。

一日市盆踊りの種類

昔は、あねこもさ・袖子踊り・ばらばら踊り・ちらし・三脚・打小身等があり、手振り足さばきなど多彩でしたが、長い年月の間に見る踊りではなくなり、いわゆる踊る踊りとして大衆化し、テンポの速い「でんでんづく踊り」「きたかさ踊り」が残されています。

さらに文化年代（1804年～1814年）に入ると都から取り入れた優雅な「三勝踊り」が加えられました。歌詞は土地自慢や、豊作祝いなどユーモラスな内容です。